

山と博物館

第54巻 第4号 2009年4月25日

市立大町山岳博物館



カッコウ♂ (撮影 中村照男)

企画展「羽は語る」に寄せて

中村 照男

鳥の一番の特徴は翼で自由に空を飛べることである。ペンギンやダチョウのように例外もあるが、ほとんどの鳥は自由に空を飛ぶ事が出来る。しかし鳥は空を飛ぶ為に体の様々な部分を犠牲にしているのだ。

骨は体を軽くする為に空洞になっているし、手は翼になつたので物を掴めない。

それでも獸などの敵に襲われた時、空に逃げれば助かる確率は高まるし、餌を求めて広い範囲を行動出来るのは、生きて行くのに有利である。動物の中にも飛べる者がいる。ムササビは滑空だけだが、コウモリはかなり自由に飛び回れる。それでも鳥と比べると飛翔能力は劣るし、やはり翼に羽を持つているか、いないかの差のような気がする。鳥の翼の特徴は何と言つても羽で出来ている事である。羽は軽くて丈夫で保温性にも優れている。しかも少々裂けてもクチバシでしごけば修理可能と伝う仕掛けも持つていて。そして定期的に新しく生え替わるし、色彩も様々である。羽は♀を惹き付ける化粧の役目もしている。鳥が鳥であるのは、羽の翼を持っているからである。

(日本野鳥の会会員)

企画展「羽は語る」開催のお知らせ

鳥はそれぞれ種類によって、生えている羽の形や大きさ、色、模様などが決まっています。野外を散策のおり見つけることのできる野鳥の羽に焦点をあて、一枚の羽から知ることのできる様々な羽の不思議に迫ります。

企画展開催期間 平成21年4月29日(火)～5月31日(日)

期間中の休館日 5月7日(木)、11日(月)、18日(月)、25日(月)の4日間

関連イベント 「小鳥の声を聞く会」申込み要
5月10日(日)午前4時30分～12時

学校教育における野鳥調査と保護活動の実践から

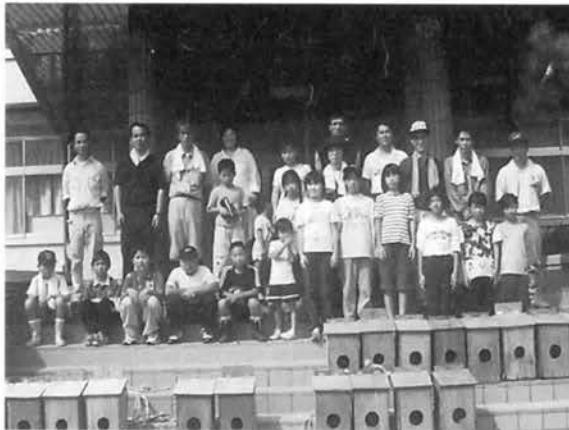
田畠 孝宏

下伊那郡天龍村における
ブッポウソウの保護活動から

(天龍小学校開校十周年記念誌より)

分布が局地的で生息数も少ない本種は、昭和の初めからその生息地であった各地の寺社林が国の天然記念物に指定され保護されてきた。本県では木曾町御岳神社・八幡社がそれである。しかし、今ではそのほとんどの場所から本種は姿を消し、環境省・県指定の絶滅危惧種、県の天然記念物である。

昭和六十年に九番の繁殖が見つかって、県最北端に位置する下水内郡栄村では、翌年より枯れ朽ちた営巣樹が雪の重さに耐えられず



ブッポウソウの巣箱と子どもたち

子どもたちと地域の方々に支えられ
確かに守られてきたブッポウソウ

平成九年七月十五日午前四時、四年生の子
どもたち全員が天龍村役場の駐車場に集まつ

一方、県最南端に位置する下伊那郡天龍村では、平成九年四月、天龍村立平岡小学校（現天龍小学校）の四年生が、村内に環境の異なる五つの調査コースを設け、野鳥観察を始めた。一年間に三〇回のセンサス調査を行った結果、三〇科六五種の野鳥を確認した。観察を続ける中で、子どもたちは役場庁舎の排気口で繁殖する本種をみつけ、その後、定期的に観察を続けた。

翌日、秦正村長より工事中断の知らせが届く。子どもたちと共に、ブッポウソウの無事を喜んだ。その後、役場からは連日のようないい電話が。「まだ雛は巣立ちませんか。いつ頃巣立ちますか」「お盆明けには工事を済ませ

に倒れたり、巣穴に水が溜まって繁殖に失敗する番が見られたりするようになった。そこで、昭和六十三年年より地元栄村立栄中学校科学部員らによる巣箱設置が行われるようになった。巣箱は毎五月の連休を利用して、本種の繁殖が確認された村内五地域にある七つのブナ林内へ計十一十個が設置されている。

巣箱かけを行った初年度は、繁殖した八番のうち一番のみの利用であったが、徐々に巣箱での繁殖数が増え、四年目には十番中七番が巣箱で繁殖するようになった。しかし、その後、栄村では年を追うごとに繁殖番数が減少し、平成十九年は六番の繁殖（うち一番のみ樹洞営巣）にとどまっている。

一方、県最南端に位置する下伊那郡天龍村では、平成九年四月、天龍村立平岡小学校（現天龍小学校）の四年生が、村内に環境の異なる五つの調査コースを設け、野鳥観察を始めた。一年間に三〇回のセンサス調査を行った結果、三〇科六五種の野鳥を確認した。観察を続ける中で、子どもたちは役場庁舎の排気口で繁殖する本種をみつけ、その後、定期的に観察を続けた。

夏休みに入つて四日目の七月二十九日、ようやく最後の雛の巣立ちを確認。一緒に雛の巣立ちを見守つてくれた子どもたちも、ほつとした様子であった。無理もない、連日、早朝から炎天下での観察であつたのだから。この出来事をきっかけに、子どもたちのブッポウソウ保護への気運はいっきに高まった。

「巣箱を作つてかけよう」「林もいいけど、橋にもかけたら。だって、役場の排気口で繁殖するのだもの」。こうして「めざそう！ブッポウソウのすむ村『天龍村』！」の活動が始まつた。

実際に巣箱を作り始めたのは翌年四月。「なつみさんたち（向方小、福島小の子どもたち）が来たら、一緒に作ろう」との、子どもたちの心遣いからである。子どもたちが五年生を

た。ブッポウソウの雛の誕生を確かめるためである。階下の駐車場でじっと耳を澄ますこと三十分。屋上にある排気口から「キチキチ……」と、二羽の雛の声。雛の誕生を喜び合ひ、無事に巣立つ日を願つた。



巣箱で繁殖するブッポウソウ

葉、三重などの中京方面を中心に、東京、千葉、大阪など全国からいらした百名を超える方々が苗を買ってくださいました。中には「お釣りは材料費に使って」とか、「苗はいらないうから」と、お金だけを寄付をしてくださる方々や、励ましの手紙を送つて下さる方々もおられ、とても励みになりました。

くれる動物がいて、うれしくなりました。
结局、昨年はフクロウの繁殖を確認することができませんでしたが、2つの巣箱でムササビが繁殖してくれました。

今年（六年時）の調査・活動から

八月二十八日と九月十一日に巣箱作りをしました。新聞の記事で私たちの活動を知った、県林務課の方々も材料の杉板を届けてくださいました。巣箱作りのお手伝いをしてくださつたりしました。巣箱作りで一番苦労したことは、巣箱や巣穴の大きさを決めるのことでした。

今年四月一日、二年目の繁殖確認調査を行いました。その結果、三十六個の巣箱のうち三つの巣箱でフクロウの卵が見つかりました。卵が見つかった巣箱では、四月二十二日以後、一週間おきにヒナの成長の様子や親鳥が巣箱へ出入りする様子をカメラやビデオカメラで記録しました。

ス。しかし、餌を捕るのはオスで、巣や巣の近くでメスに餌を渡しているようだ。
○鳥にも、お互いを思いやる気持ちがある。
昨年までは、学級としての取り組みでしたが、フクロウの繁殖をきっかけに、今年からは学校・育成会も協力して巣箱作りや巣箱かけを行つてくださるようになりました。また

終わりに

私たちちは、三年間において、ふるさと伍和の自然の豊かさ、すばらしさを実感することができました。そして、自然の厳しさと優しさも、さらに、多くの方々の親切や真心にも触れることができました。私たちの活動を理解し、支え、協力してくださった多くの方々に感謝いたします。本当に多くの方々の協力を得て、ようやく私たちが作った巣箱でフクロウが繁殖してくれるようになりました。今後も、みんなでこの活動を続け、フクロウを守つていらっしゃることで、この活動が長く続ければいいのです。

人事異動のお知らせ

平成二〇年三月三〇日付けで臨時職員・前
基子動物飼育員が退職しました。

平成二〇年四月一日付けで庶務・合津明主
が産業建設部建設課維持係へ、学芸員・峯
隆主任が教育委員会生涯学習課文化財係へ
務・平林恵理子主事が民生部福祉課福祉係
転出し、教育委員会生涯学習課文化財係へ
清水隆寿主任が、総務部税務課税務担当よ
岩田直美主事が転入、臨時職員・上良智動
飼育員が新規採用となりました。

平成二年三月三〇日付けで臨時職員・岩尚也動物飼育員が退職しました。

平成二年四月一日付で臨時職員・小嶋太動物飼育員が新規採用となりました。

山と博物館 第54巻 第4号
二〇〇九年四月二十五日発行
長野県大町市大町八〇五六一
市立大町山岳博物館

TEL 〇一六一-111-〇一一一

四月三日に、三十六個の全ての巣箱でフクロウの繁殖の有無を確認しました。はしごに登り、巣箱に手を入れた農志君が、「何かおる。」と言いました。「もしかしてフクロウ?」みんなの視線が農志君に集まりました。しか

昨年（五年時）の繁殖確認調査から

十月三十日と十一月十三日に巣箱をかけました。巣箱は、実際に自分たちが鳴き声を聞いた場所と、地域の方々へのアンケート調査をもとに、声が聞かれた場所、かつてフクロウが繁殖・生息していた場所にかけました。

たりしました。巣箱作りで一番苦労したこと
は、巣箱や巣穴の大きさを決めるごとでした。
本やインターネットで調べてもわかりません。
そこで、信州大学教育学部教授の中村浩志先
生に教えていただきました。巣箱は全部で三
十六個作りました。お父さんやお母さんに手
伝つていただきながらの巣箱作りでしたが、
のこぎりを使つたり、インパクトドリル使つ
たりと、とても良い経験になりました。

たりしました。巣箱作りで一番苦労したこと
は、巣箱や巣穴の大きさを決めるのことでした。

巣箱へ出入りする様子をカメラやビデオカメラで記録しました。

絶句

私たち、三年間におよぶフクロウの保護

【山博物館】第55卷第11号のP31段
写真解説「坑口下の崩壊地から出てきた鋳
型（重量30kg）、底には溶けた銅が付着して
る」に訂正をお願い致します。

『山と博物館』第53巻第4号のP2の一段
□ 4 行 □ の 種 名 *Eurema*
nandarina(*del'Orza*,1869)を*Eurema*
nandarina (*del'Orza*,1869) として □ 21